

# 総合的な学習の時間その誕生から20年

千葉大学名誉教授 <sup>あまがさ</sup>天笠 <sup>しげる</sup>茂

## 1 「生きる力」と総合的な学習の時間

「生きる力」は、中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」（1996（平成8）年7月19日）の提起にある。「生きる力」を次のように説明する。

「我々はこれからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を「生きる力」と称することとし、これらをバランスよくはぐくんでいくことが重要であると考えた。」

その上で、「生きる力」の育成にあたり、「各教科の教育内容を厳選することにより時間を生み出し、一定のまとまった時間（以下、「総合的な学習の時間」と称する。）を設けて横断的・総合的な指導を行うことを提言したい。」と述べている。「生きる力」を育てるために、教科の縮減を図り一定の時間を教育課程に生み出す。これが「総合的な学習の時間」のスタートであった。

## 2 生き残った総合的な学習の時間

“「生きる力」は変わりません、学習指導要領は変わります。”とは、平成20年版学習指導要領をめぐって文部科学省が掲げたスロー

ガンである。平成15年の一部改正によって、校内研修も総合的な学習の時間から国語、算数・数学へと一気にシフトとした。学校現場に急速な総合的な学習の時間離れが起きた。そして、平成20年改訂の学習指導要領が誕生。

その改訂の基本的方針を示した中央教育審議会答申（平成20年1月17日）は、「総合的な学習の時間を創設したが、学校教育全体で思考力・判断力・表現力等を育成するための各教科と総合的な学習の時間との適切な役割分担と連携が必ずしも十分に図れていない…」と述べ、存続をめぐり、総合的な学習の時間を見直しを迫られることになった。

結果は、授業時数について、小学校第3学年から中学校第3学年まで70時間（中学校第1学年は50時間）と縮減が取られたものの、学習指導要領上の位置付けとして、総則から取り出して新たに章が立てられたり、具体的な目標や内容は各学校において定めるとした従来の方針が引き継がれたりするというものであった。

「生きる力」が、総合的な学習の時間の次を確保したことになり、その方向性は今回の学習指導要領改訂にも引き継がれた。

## 3 三つのタイプの併存

このような変遷を辿りつつ、学校現場での実際の取組を通して、次のような概ね三つのタイプが併存する形で総合的な学習の時間はある。

第1のタイプとして、環境など現代的課題を取り上げて取り組む総合的な学習の時間。

第2のタイプとして、特別活動とりわけ学校行事と一体化した総合的な学習の時間。

第3のタイプとして、自分（達）で課題を見つけ、問題の解決を図る総合的な学習の時間。

これらは、重なり合い判然と区分けできない点を有しつつも、実際に多くを占めるのが第2のタイプであり、第3のタイプは広がりには欠け、両者の間に存在するのが第1のタイプという状況にある。

いずれかのタイプが望ましいということよりも、それぞれマンネリ化や形式化が心配される状態にあり、改善を必要とする課題を抱えており、リニューアルが問われている。

#### 4 次の10年をめぐる三つのキーワード

これら総合的な学習の時間にとって、将来へのキーワードとして三つあげておきたい。

まずは、①育てたい資質・能力について。このたびの学習指導要領改訂の方向性を提言した中央教育審議会答申（平成28年12月21日）は、「『生きる力』とは何かを資質・能力として具体化し、教育目標や教育内容として明示したり、教科等間のつながりがわかりやすくなるよう示し方を工夫していくことが求められる。」と述べている。

これを受けて、「生きる力」を資質・能力として精緻化を図り三つに整理したのが、このたびの学習指導要領であり、それらを全ての教科等のつながりの中で育くむことを、“教科等横断”をキーワードにして強調したのが、このたびの改訂である。

このように「生きる力」を一步進めたとするならば、これに呼応して総合的な学習の時間もまた一步進めることが問われたことになる。いかなる資質・能力の育成をめざした総合的な学習の時間なのか。創設以来の課題でもある。その点において、このたびの資質・能

力の明確化は、総合的な学習の時間を進化させる呼び水といえなくもない。何を育てる総合的な学習の時間なのかが問われている。

次に、②教科等間の連携や横断について。教科等で学ぶことと総合的な学習の時間で学ぶことをいかにつなぐか。これまた創設以来のテーマである。

教科等で学んだことを教科等の枠を越えて活用していく学びにつなげていく。そうした学びによって、教科等横断的に育む資質・能力は育成される。その点において、教科等間の内容について相互の関連を図る全体計画や、教科等横断的な学びを行う総合的な学習の時間が問われることになる。

いずれにしても、教科等の連携・横断のコアとしての総合的な学習の時間の在り方を探るとともに、その役割をどこまで担うことができるかを探求することもまた、次に向けての試金石ということになる。

さらに、③個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実について。これを総合的な学習の時間がどのように引き受けるか。これまた、総合的な学習の時間のこれからを展望することにおいて大切な課題である。一体的充実の実現に、総合的な学習の時間は大きな役割を果たしうる可能性を秘めており、その取組が期待されるところである。

いずれにしても、これら三つのキーワードへの向き合い方いかんによって、その先に開ける展望も異なったものになるに相違ない。

#### 【参考文献】

- ・天笠 茂編著『新しい教育課程と学習活動の実践 総合的な学習』 東洋館出版社 1999年8月
- ・天笠 茂『新教育課程を創る学校経営戦略－カリキュラム・マネジメントの理論と実践－』 ぎょうせい 2020年4月